

光科学重点研究室・光触媒グループ中間評価報告書

評価委員：井上晴夫(首都大学東京 都市環境学部 学部長 教授)

竹内浩士((独)産業技術 環境管理技術研究部門 主幹研究員)

能村 卓(太陽工業株式会社 取締役)

石原祐志(神奈川県企画部参事(科学技術振興担当))

グループリーダー：藤嶋 昭 光触媒グループ・グループリーダー

業績は大変あがっており、光触媒グループ全体として総合的に高く評価できるというのが本委員会の意見である。KAST に対しても光触媒グループを創設し、光触媒に係る研究事業を推進していることは適切な判断であり、更なる発展を望むものである。

特に、各委員から出されたコメントにもある強みとなる部分をなお一層伸ばしてもらいたい。

光触媒ミュージアムは教育的なことも含め、活発に活動されることを望むものであり、それが可能な所と思われる。

以下、各委員の立場(大学、独立行政法人、産業界、神奈川県)でコメントしたい。

・大学の立場から

約1年6ヶ月の研究成果、活動報告からグループの人員が4～5人の体制で通常の研究グループの感覚からすると驚異的な実績を上げていると評価できる。研究者の人選、研究グループの運営方法が適当であることの証左と言えよう。特許出願も4件あり、必ずしも出願数が多ければ意味があるというものではないが、研究成果を権利化することへの意欲も十分で、権利化の視点を含めた展開が為されていると思われる。単なる応用研究だけでなく、将来のシーズにつながる基礎研究、世界を先導し世界をリードする光触媒の基準作りもされており、KAST の強み、神奈川県、しいては日本の強みとして光触媒グループを発展させてほしい。

・独立行政法人の研究機関の立場から

最先端の研究、企業との連携、光触媒オープンラボ、光触媒の啓蒙・普及活動となる光触媒ミュージアム、それぞれの活動報告から、本来ならば元国立研究所が行うべきことを非常にコンパクトに万遍なくされており、少数精鋭で成果があがっている印象を受けた。成果発表も論文、特許がバランス良く出されていると思われる。企業との共同研究もその負担金が全予算の 20%近くを占めるなど活発であり、加えて地元企業も含まれ、地域密着という観点からも良好な関係を築いている印象がある。

・産業界の立場から

グループ独自の研究と企業との共同研究のバランスが良く取れて高い成果が出て

いると思われる。KAST は大学や産総研よりもじっくりと研究できる環境が整い始めていると思われ、願わくは、その強みを更に伸ばして欲しい。

光触媒ミュージアムの存在は、業界としても大変有効と考えており、業界からの要望として神奈川県への支援のもと長期的展望で考えて頂きたい。光触媒オープンラボも新たに光触媒事業に参入する企業にとって実験等の指導が受けられることは非常に有効であり、利用が一時的に減少することがあっても続けてもらいたい。

また、将来、KAST が JIS 評価機関になることも業界として歓迎されることであり是非とも実現してもらいたい。

・神奈川県の立場から

光触媒ミュージアムの活動は従来の KAST になかったものであり、このような教育・啓蒙活動は大変有意義と思われるので今後も続けてもらいたい。また、JIS の評価機関に KAST になることも有意義なことと考えており神奈川県としても出来る限りサポートをしたい。

最後に評価委員会として次の3点を要望したい。

(1) 光触媒ミュージアムの教育的波及効果があがる様に一層の尽力を願うものである。例えば、小、中、高校生がそれぞれの目的に応じて見学できるよう、ミュージアムを含めて KAST 内、KSP 内のツアーが企画できるコーディネータの配置ができないか検討いただきたい。多数の人が組織的に来場できる試みを望むものである。

(2) KAST が JIS の評価機関となるよう、実現に向けて KAST として一層推進して頂きたい。

(3) 光触媒グループの常勤スタッフの数が少ないように感じられる。息の長い研究の継続や外部からの研究費獲得を進めるためには、常勤スタッフの数に大きく影響される。財政状況が許せば、もっと増員する方向で努力してもらいたい。

なお、今回の評価に際し、発表は資料に中長期的な展望が含まれていれば、更に評価委員の理解が進んだと言えよう。また、全体を俯瞰できる決算資料も欲しい。次回より是非とも考慮願いたい。

以上

平成 18 年 9 月 28 日

委員長 井上晴夫